

出題のねらい

公募制推薦入試(後期)は、文学的文章と論理的文章、それぞれ1題ずつ出題されます。文学的文章においても、論理的文章と同様、自らの感性に任せて読むのではなく、物語や議論の展開を正確に把握し、表現を的確に読み解くことが求められます。

㊦は、水上勉『土を喰う日々』からの出題です。禅宗の精進料理に造詣の深い著者による、食エッセイの名著として知られています。文章そのものは平易であるものの、書かれていない事柄に勝手な想像をめぐらすのではなく、書かれている事に注目し、慎重に読み解けるかどうか問われます。

㊧は、香西秀信『論より詭弁 反論理的思考のすすめ』からの出題です。問題文として取り上げた箇所は、「詭弁／虚偽」とは何か、「論理的である」ということはどういうことであるかが説かれています。最近の社会的風潮とは相反するところもあり、「常識」とらわれず、丁寧に読み解くことがポイントとなります。



【解答】(50点)

問一	a 配慮	b 賞味	c 服従	d 短冊	
	e 叱				(2点×5)
問二	I ア	II イ	III ア	IV エ	V イ
					(2点×5)
問三	エ				(4点)
問四	ウ				(4点)
問五	冬場は青い葉が少ないため、こまかく切ってまぶし、青を食膳に目立たせる。				(7点)
問六	ウ				(4点)
問七	材料の持ち味を知り、互いの持ち味を出し合っ、完全な一つの味を出せるようになること。				(7点)
問八	イ				(4点)

【解説】

問一 漢字の知識を測る問題です。難しい漢字を書けるかどうかではなく、各漢字の意味を正確に理解し、熟語として用いる力が求められます。よく出来ていたのはaのみでした。一例として、d「冊」を「柵」とする誤答があります。こうした誤りは、漢字の意味を正確に理解せず、音や形の類似した文字を混同しているために起こります。

問二 慣用表現に対する知識、文脈に合う語句を選ぶ判断力を測る問題で、語彙力が求められます。よく出来ていたのはIIIのみ。語彙力は、日頃の読書習慣に大きく左右されます。

問三 本文をよく読み、叙述の展開を適切に把握する思考力・判断力を測る問題です。傍線部「これ」が指示するのは、直前の段落、本来は「客の好みをそんたくし猥げられるべきご馳走」である「猥立」が、「押しつける」ものになってしまっているという、皮肉を込めた議論です。そのような皮肉には、「当然異論」があり、本当は「猥立はやはり客のことが大事」で、客の好みをそんたくして猥げられるべきなのだ、著者の考えを改めて述べています。これらの議論の展開を適切に説明しているのは正答のみです。

問四 前後の文脈から、表現に込められた意図を読み取る思考力・判断力を測る問題です。選択肢をよく読み、本文に記されていない事柄を含むものを排除すれば、おのずと正答に至ります。アは「高野豆腐よりもスープの方がおいしい」、イは「実は煮物だと認めていた」、エは「高野豆腐のおいしさを理解できなかった」が、それぞれ本文に記されていない事柄です。

問五 記述問題です。設問の要求を理解し、前後の叙述を慎重に読み解く思考力、読み解いた内容を適切に要約する表現力を測ります。設問の要求は3つあり、①「そのような工夫がなぜ必要で」、②「どのような工夫をし」、③「どのような効果を得るのか」に答える必要があります。それらが記されているのは、傍線部の次の段落です。②の「工夫」に該当する「そういうまぶし方」は、前の段落の「こまかく切ってまぶす」を指します。傍線部と同じ段落の記述をそのまま抜き出す誤答が目立ちました。「高野豆腐にまぶした……あえものはおもしろい」「趣向のいい味」は、設問の要求に合致しません。

問六 本文をよく読み、書かれている事、書かれていない事を適切に判別する、思考力・判断力を測る問題です。本文の内容に合致しないのはウのみです。「同じ形式のものは絶対に作らない」のは、直前の段落に述べられた老師の態度であって、傍線部の説明ではありません。

問七 記述問題です。本文を慎重に読み解く思考力、読み解いた内容を適切に要約する表現力を測ります。設問に対する解答は、直前の段落に記されています。「その持ち味を知る」を含めない解答が目立ちました。これは「お互いの持ち味を出しあ」うための前提ですから、これを含めて、はじめて完答です。

問八 本文全体のテーマを適切に理解する思考力・判断力を測る問題です。正答を除く他の選択肢は、本文に書かれていない要素を含んでいる、あるいは、本文の一部の話題にしか触れていません。



【解答】(50点)

問一	a 疑惑	b 模索	c 矛盾	d 批判	
	e 幼稚				(2点×5)
問二	I オ	II エ	III ア	IV ウ	V イ
					(2点×5)
問三	A オ	B ウ	C オ		(3点×3)
問四	定義の修正史				(5点)
問五	ウ				(3点)
問六	勝ち誇る				(4点)
問七	定義の要求に馬鹿正直に応じると、その結果、散々に論破されて立ち往生し、論理を悪用する口先だけの人間をのさばらせてしまうことになるから。				(6点)
問八	ウ				(3点)

【解説】

問一 漢字の書き取り問題です。どれも難問ではありません。b模索 c矛盾に誤答が大きく目立ちました。とくにbは「模策」という解答が、多く見られました。

問二 文や段落の展開を示す語句を補う空欄補充の問題です。①前後の文脈がどのような関係にあるか、②その関係を繋ぐ場合にどの語句が相応しいか、これらをきちんとおさえる必要があります。I、III、Vに誤答が多く見られました。まず、Iの前の文章では「誤った応答」と「詭弁的応答」との見分けは、「容易なことではない」とあります。そして、後の文章では相手の「応答」を「詭弁」と判断するには、「根拠／証拠」が必要だと述べられています。前後の部分をつなげると、見分けが容易ではないから、根拠や論拠が必要だということになります。選択肢のうち、「から」に最も近いものが正解となります。次にIIIですが、3行前に「広い定義が好まれる傾向にある」とある一方で、後には「広い定義などにほとんど意味はない」とあります。前後をつなげると、広い定義が好まれ、採用されている状況であるが、それにはほとんど意味がないということです。したがって、逆説の接続助詞「が」に相当するものが正解となります。最後にVは、文頭でなく文中にあります。前には「こうしたやり方は」とあり、後には「論理的に邪道／ルール違反」とあります。「こうしたやり方」は前段落の内容ですから、これを「論理的に邪道／ルール違反」とすることに異論を差し挟む余地はないでしょう。この状態(態度・判断)を表すことばが正解となります。

公募制推薦入試／国語(後期)

問三 ことわざ・慣用句、四字熟語に関する、空所補充問題です。A「鬼の首をとる」、B「四苦八苦」、C「木で鼻をくくる」、どれも難しいことばではありません。

問四 語句に関する問題です。「こうしたことの繰り返し」と同様の意味で用いられている語句を、これより前の本文中から6文字で抜き出します。「こうしたことの繰り返し」の具体的内容は、直前の文章にあります。「つまり……」以下の文章が、何について述べているかをおさえていれば、正解にたどり着けます。これより後の本文中から抜き出した解答も少なからず見られました。言うまでもないことですが、設問文はよく読みましょう。

問五 適切に、書かれていること／書かれていないことを判別できるかを問う問題です。まず、ア「意味が消失」とありますが、むしろ「消失」しないからこそ「統一的な定義はほぼ不可能」なのです。次に、イ「狭い定義が好まれる」とありますが、本文にはそれとは逆に「広い定義が好まれる傾向にある」とあります。そして、エについては、ほぼ同内容の文章が見られます。しかし、この文章は、そもそも「こういう次第」の指す内容に含まれてはいません。それは、「こういう次第」の後方にあるからです。

問六 ここの語句に関する問題です。「凱歌を上げる」と同様の意味で用いられている語句を4文字で抜き出します。少し難しい問題であったかもしれませんが、文脈から意味を想像することは可能かと思えます。

問七 本文内容を正確に読み取り、本文中の語句を用いながら、自らの言葉で表現する問題です。要求に正直に応じると、立ち往生するという、論理を悪用する人間をのさばらせてしまうということ、以上の2点を踏まえる必要があります。また設問文に、「なぜ」とありますから、文末に注意しましょう。

問八 ここの、適切に、書かれていること／書かれていないことを判別できるかを問う問題です。まず、アについて「定義」を求めているのは、文芸評論家ではなく、国語教育の関係者です。次に、イについて、本文には、「詭弁」よりも「虚偽・誤謬」の方が用語としてよく使用される、とあります。そして、エについては、本文に「証拠もなく決めつけてもかまわないと思っている」「われわれが論理的であるのは、論理的でないことがわれわれにとって不利になるときだけでいい」とありますから、内容に合致しません。